

においコーナーの展示更新について

小野 昌弘 *

概要

当館展示場3階は「身近に化学」というテーマで、化学に特化した展示場で運営している。その中に香りを題材として、化学的な内容を紹介する「においコーナー」があるが、その展示の一部を更新したので、その内容について報告する。

1. はじめに

2008年に展示場3階に開設したにおいコーナー。当初は、香りの原料となる、資料類や香りを体験できる展示、脱臭に関する展示などで構成していたが、においの展示群として考えた場合、物量としてまた見学者の思考や理解の広がり、深まりを導く上で成功しているとは言えない状態だった。展示改善の意見があったことや製作者としても不足している部分を補うべく、4種の展示物をにおいコーナーに設置した。以下にそれら展示の概要について紹介する。

2. 設置展示

2-1. スカンク(はく製)

大阪市立天王寺動物園蔵。2体を借用し、設置している。スカンクというと、一般的には、くさいおならをする動物というイメージで捉えられている。そのスカンクのはく製を収めた展示ケース(写真1)を、展示「自然の



写真1. スカンク

作るにおい」の前に設置し、見た目のインパクトを来館者に与えられるようにした。目に付きやすい位置に設置しているためか、小学生などに良く囲まれる形で見られている。動物のはく製を置くというのは、理工系の博物館としてはこれまでなかったと考えられる。ただ、このようなよく知られている資料を展示することで、来館者の目に止まりやすく、この後に続く展示にも引き付けることのできる、良い導入展示となっている。このスカンクの解説では、スカンクの悪臭の元がブタンチオールであることを紹介した。香料の原料となる物がほとんどが植物系で、動物からは4種類しか使われていないが、悪臭となるとスカンクを初めさまざまな動物の体内で作られる素地がある。自分達の防衛のため獲得したこの悪臭によってスカンクは、有名であるが、それゆえに展示場に設置した時のインパクトが大きく、来館者の目にとまる。

2-2. 昆虫

テントウムシ、カメムシ、ミイデラゴミムシといったにお



写真2. にょう虫

*大阪市立科学館
ono@sci-museum.jp

いに関係する虫を大阪市立自然史博物館から借用し展示している(写真 2)。世間一般でおいを発する虫というカメムシがその筆頭に上げられると思うが、その悪い印象からまじまじとカメムシの姿を眺めることは少ないのではないかと思う。また、カメムシに種類によっても少しずつ発するにおいの元が異なっており、それらの主要成分を紹介する展示とした。他にも、テントウムシ、ミイデラゴミムシについても紹介しているが、スカンク同様、理工系博物館である当科学館において昆虫標本が設置してあるということは、意外性を持って来館者に見学されている様子である。



写真3. 香時計の展示

表 1 にて、本展示で紹介している昆虫のリストを示す。

2-3. 香時計

江戸時代に使われていた香時計を 1 台と中国等で使われていた、香篆盤(こうてんぱん)を展示している(写真3)。香時計は現在でも東大寺二月堂のお水取りでも使われている伝統的なものであるが、実用としてはほぼ利用されることはない。灰の上に抹香をおき、火をつけることで時間を計ると同時に香りを漂わせるというものである。

また、もう一つの香篆盤については、時を図る目的というよりも、火屋に長寿を祝う文字などを掘り込んで、そこから立ち上る香を楽しむものである。これら展示は平成 21 年度の科学館の資料購入により入手したものである。



写真4. らんびきの展示

表 1. 展示している昆虫の種類

名 称	分類	数量	
エゾカタビロオサムシ	Campalita chinense.	甲虫目オサムシ科	3
ヤコンオサムシ	Carabus yaconinus	甲虫目オサムシ科	3
マイマイカブリ	Damaster blaptoides	甲虫目オサムシ科	3
ヒョウタンゴミムシ	Scarites aterrimus	甲虫目オサムシ科	3
オサムシモドキ	Craspedonotus tibialis	甲虫目オサムシ科	3
オオゴミムシ	Lesticus magnus	甲虫目オサムシ科	3
セアカヒラタゴミムシ	Dolichus halensis	甲虫目オサムシ科	3
アオゴミムシ	Chlaenius pallipes	甲虫目オサムシ科	3
ミイデラゴミムシ	Pheropsophus jessoensis	甲虫目ホソクビゴミムシ科	3
ナナホシテントウ	Coccinella septempunctata	甲虫目テントウムシ科	3
ヒメカメノコテントウ	Propylea japonica	甲虫目テントウムシ科	3
フタモンテントウ	Adalia bipunctata	甲虫目テントウムシ科	3
ミナミアオクサカメムシ	Nezara viridula	カメムシ目カメムシ科	3
アオクサカメムシ	Nezara antennata	カメムシ目カメムシ科	3
アカスジカメムシ	Graphosoma rubrolineatum	カメムシ目カメムシ科	3
ウズラカメムシ	Aelia fieberi	カメムシ目カメムシ科	3
スコットカメムシ	Menida scotti	カメムシ目カメムシ科	3
クロカメムシ	Scotinophara lurida	カメムシ目カメムシ科	3
ホオズキカメムシ	Acanthocoris sordidus	カメムシ目ヘリカメムシ科	3
ツマキヘリカメムシ	Hygia lativentris	カメムシ目ヘリカメムシ科	3
キバラヘリカメムシ	Plinachtus bicoloripes	カメムシ目ヘリカメムシ科	3
合計			63

2-4. らんびき

らんびき(写真 4)は、現在でいうと蒸留器にあたる。成分を抽出するのに古くから使われているものであるが、実際には、薬効を期待する生薬成分を取り出したことが多いようである。しかし、香り成分を取り出すことにも実際利用できるもので、今後、西洋における香草の蒸留器も同時に展示し、その形状比較や特性などを説明する予定である。

3. まとめ

今回の展示を設置するまでは、主に各種香料のにおいを確認をできる展示と、天然香料・人工香料の実物資料を展示するだけであったので、これら資料を展示することで展示のレパートリーが増え、充実した展示エリアとなった。特にこの第3次展示改装を製作したときのコンセプトが、複数の展示を使って一つの概念を伝えることが命題でもあったので、その流れを補強する意味でも、意義のある展示改良となった。

何よりも、来館者が、スカンクや虫といった馴染みのある知識から、アプローチできるという面が強化できたため、においの展示への導入を行いやすくなった点が最大の利点であると思う。本においコーナーは、まだ、今後も改善・改良を進めていくが、とりあえず、さまざまな方々に助言をいただき、一通り形が整えられたことに本紙面を借りてお礼を申し上げます。

4. 謝辞

本展示を製作するにあたり、スカンクの標本を大阪市立天王寺動物園、昆虫の標本を大阪市立自然史博物館から借用いたしました。

また、香時計資料を収集し、展示に供していただくなど当館の嘉数学芸員にも協力頂きました。

本紙面にて改めてお礼申し上げます。

5. 参考文献

1. 古前 恒 化学生態学への招待 (1996)
2. 石井象二郎 昆虫行動の化学 (1978)
3. 小野 昌弘 大阪市立科学館研究報告 19(2009)、87-91